
clear

瀬谷和泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

clear

【Nコード】

N1262BA

【作者名】

瀬谷和泉

【あらすじ】

お好み焼き店【なぎさ】の一人娘、汐織は高校三年生。【マルイチ】のおばちゃんに拾われてきた金髪男・上総と最近付き合い始めたのは内緒。海沿いにある小さな町の小さな商店街。ほのぼの、ゆるゆると展開していく人と恋のお話。

SCENE・1 看板娘と金髪男 01

今日の客も近所の常連ばかりが顔を揃える。

【お好み焼・なぎさ】の店内が半分以上埋まるのは、決まって給料日と重なる五十日じゅうごにちだった。それ以外は 言わないでおくことにする。

鉄板から立ち上る白い湯気、じゅうじゅうと音を立てながら焼けていく生地この音、店内に広がるソースの香り。そして、客たちの賑やかに飛び交う声。

店に立つのが幼少の頃から日常的だった真田汐織さなだしおりにとって、狭い店内をめぐるしく動き回りながらの接客は自宅の一室で宴会を開いているような感覚に近かった。

「汐織ちゃんよお、ビールもらうなー」

色褪せた青色作業服の胸元に、橙色で刺繍された【佐々木自動車整備工場】の文字。

自宅の冷蔵庫から取り出すように茶色の瓶を持ち上げて見せたのは、常連の中でも一番の古株・佐々木だった。

「はい！」

カウンターに並んだ一番左の伝票。【ビール】と書かれた欄に棒線ぼうせんを一本付け足した。来店してから一時間、あと二本線を足したら【正】の字が出来上がる。

苦笑いを浮かべた汐織は、隣に数枚並べられた伝票を確認した。チエック済みの品物はまだ半分ほどだ。

「凧なぎくん、豚玉あがってる？」

「今持つてく」

目線ギリギリのカウンター越し。

覗いた向こうには、肩まで捲り上げたＴシャツに腰に巻いたエプロン姿が様になる若い男がひとり。頭にタオルを括りつけたバイトの小嶋こじま凧なぎの額には、珠の汗が浮かんでいた。

小さな店とはいっても一ヶ月の内で数回訪れる繁盛期、しかも夜という時間帯のピークにひとりで厨房を任されるのがどれだけ大変か、汐織だって知っている。けれど店主不在の今、ふたりで厨房に入る余裕もないので任せるしかなく、申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

はい、とカウンターのの上に差し出された器を受け取って、凧を励ました。

「ありがとう。忙しいのもう少しだと思っから、頑張ってね」

「渚さん帰ってきたらバイト代弾んでもらうから、気にしなくていい」

「お母さんてばいつまで遊んでるつもりなんだろうなあ、もう」

未だ帰宅する気配を見せない店主の母親は、最近少し羽根を伸ばし過ぎだ。

“味があっていい感じじゃない”と開店当初から定位置に飾られている、飛び散った油でイマイチ見えにくい時計の針を睨んで、汐織が注文の品を佐々木のテーブルに届けると隣のテーブルから追加の注文が入って来る。

「明太もんじゃと、海鮮お好みにキムチトッピングで。あ、あとピ

ール二本とウーロン茶」

「はい。グラスは二つでいいよね」

グラスと飲み物を先に届けて、風を追加オーダーを入れる。

今日は日中三十度近い暑さだったせいで、飛ぶように売れていく瓶ビール。汐織の胸にも届かない背の低いガラス張り保冷庫の中も、そろそろ空になりそうだ。

ストックを確認する為に厨房に回って鉛色の扉を開けた汐織は、中を覗いて愕然とした。

「やだ……冷やすの忘れてた、どうしよう!」

がーん、なんてお決まりの効果音をぼそりと呟く。

頭を抱えて呆然としている暇があるなら、すぐに【マルイチ】に電話して冷えた瓶ビール配達してもらわなければ。

扉を閉めて表に回り電話の子機を手にとった。ボタンは「短縮」と「3」のふたつを押せばすぐに繋がる。数字の上に汐織の指が乗せられた時、店の裏側でビンの擦れ合う音が聞こえた。

(ホントいつもタイミングいいんだから)

救いの神に頬を緩めて感謝しながら、汐織が厨房を抜けて素早く勝手口を開いた。

【酒のマルイチ】と書かれた軽トラの荷台に空きビンの差し込まれたケースを積み込む人の姿があった。暗がりでも分かるくらいの金髪頭が彼の目印だ。

「ねえ上総かすね、今から急いで冷えた瓶ビール二ケース、ううん、一ケースでいいから持ってきてくれない? お願い!」

「やだね。俺はこれで仕事上がりなんだよ」
「つまみご馳走するから協力してよ。今日お母さんいなくてめっちゃくちゃ忙しいの！ お願いね、頼んだからね。お母さんの株上げるチャンスだよ」

返事は聞かず一方的に言い捨てて扉を閉めた。ビールが届けられるかどうかは一か八かの賭けみたいなものだけど、きっと届けてくれると汐織は信じている。ラストの一言が上総を釣るには効果的なを十分に心得ているからだ。

急いで店内に戻ると、カウンターに準備された器を凧が客に配っているところだった。

「ごめん凧くん、そんなことまでやらせて」

「いいって、渚さんに口添えしてもらえれば。追加の話はついた？」
「うん、多分大丈夫」

そっか、と笑う凧と汐織の和やかな雰囲気、割って入った佐々木の声が絶好調だった。

「やあーっぱり、二人並ぶと若夫婦みてえでいいなあ。凧はいいダンナになるって渚ちゃん
にはオレからも言ってるから、心配すんなや」

豪語するほど酒が強い訳でもないのに浴びるようにビールばかりを口にする世話好きの中年。日焼けを重ねた黒い顔でもはつきり見て取れるくらい朱に染まって“飲み過ぎ警報”を発令中だった。

豪快な笑い声と勢いが止まらず、グローブのように分厚い手が凧の細い腰を思い切り叩きつける。

「いつっ」

「これくれえで痛いだのと騒いでどうすんだ、男はここ鍛えてナンボだぞ！」

少々下ネタ混じりに説教しながらバシバシと、楽しそうに二・三度繰り返す。

男子の誕生を切望して精を出してはみたものの見事というか憐れというか、結局四姉妹の父親となった佐々木は風が偉くお気に入りだ。

酔いもいい感じで回ってくると、酒の肴みたいに彼を汐織の“ダシナ候補”として語り始める。

「オレ厨房戻るから、シオ、あとヨロシク」

絡み始めた佐々木に嫌な顔一つせず、風はタイミングを計って厨房へ駆け込んだ。腰を摩りつつ逃げる後ろ姿が汐織には可笑しかった。

「汐織ちゃんが高校卒業したら、結婚でもしてふたりで店継いだらいいや。祝儀はたっぷり用意しといてやるからよお」

「佐々木さん、飲み過ぎだよ」

「なあに言ってるんだ。まだまだあ」

この様子では閉店まで帰りそうもない。さて、どうしたものかと汐織が思案を巡らせた時だった。

「渚さんがいないとやりたい放題だな、おっさん」

店の入り口付近に大瓶の入ったビールケースを軽々と抱えた上総が、怪訝な表情をして立っていた。

商店街の飲食店はみな世話になっている【マルイチ】は、汐織の

店から二軒隣りに店を構えている。

「無駄に店を忙しくしてんのは、セクハラ親父の絡みが原因かよ。唯一の駆け込み寺にそのうち出入り禁止喰らっても知らねーぞ」

佐々木に毒を吐きつつ店内を横切り、上総がガラスの庫内へと手際よく冷えた瓶ビールを詰め込んでいく。

「ありがと。絶対来てくれると思ってた」

「あんなこと言われたら来るしかねえだろ」

口元を歪めながら笑って見せる彼の元へ、千鳥足気味の佐々木がやって来た。

「……こんのクソガキ。相変わらずの減らず口に、派手なツラしやがって」

「そう僻むなよ。これも立派な商売道具なんだぜ。そっちの商売傾きかけたら、また営業に貸してやつから」

ゆっくりと立ち上り不敵な笑みを浮かべた背の高い上総に、少し虚ろな目をして咬みついた。

「だーれがおめえに貸しなんて作るか！ はっ！ あんな騒がしいのは二度とご免だわ！」

凧とは対照的に、佐々木はこの彼を酷く嫌ってる。

「人が取って来た仕事こなせねーそっちの事情だろうが。責任擦りつけんな」

去年の秋頃だったろうか。

営業の仕事を軽視する物言いをした上総とそれに反発した佐々木が、同じようにこの【なぎさ】の店内で口論になった。

結果、金髪頭そのままでワイシャツにネクタイを締めた上総が営業に回って、目をつけた配送会社を次々当たっては点検・整備の仕事を手ほどきして帰って来た。のんびりまったり仕事を進める佐々木の会社一年分の仕事量を遥かに超えてしまい、ちよつとした騒ぎになった経緯がある。

「シオ。明太もんじゃと海鮮お好みキムチトッピング、上がりね。あれ 賑やかだと思ったら、上総か」
「来てくれたのは助かるんだけどね」

カウンター越しに器を受け取り、後方で未だ賑やかに嫌味の応酬を続けている二人を目で追って、汐織の口から自然とため息が漏れた。

「ほんとーに口の利き方がなってねえガキだな！」
「おっさんこそこんなところで油売ってねえで、さっさと家帰れよ。配達行く度に女五人に飯食ってけてって連れ込まれるこっちの身にもなってみろ、次は風呂にでも連れ込まれんぞ俺」
「な……なにいつ!!」

すっかり店内のお客さんの見世物と化しているふたりの口論は、しばらく収まりそうにもない。

お母さん、お願いだから早く帰って来て。

汐織はもう一度、時計を睨みつけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1262ba/>

clear

2012年1月3日01時50分発行